精神障害を抱える同胞に対するきょうだいの感情変化

ーライフイベントごとの変化に注目してー

筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻博士後期１年　**阪井 宏行**（009068）

名川 勝（筑波大学・001915）

［キーワード］精神障害、きょうだい、感情変化

１．研 究 目 的

本研究において、「同胞」を障害を持つ当事者、「きょうだい」を当事者の兄弟姉妹として、使用する。本研究の目的は以下の３点とした。

・きょうだいと同胞の関わりの中には、どのようなライフイベントが存在するのかを明確化する。

・どのようなライフイベントで、同胞に対しての感情を変化させるのかに加え、それに影響を与える諸条件を明らかにする。

・以上のようなことを明らかにし、同胞に対する感情の変化には、どのような段階が存在するのかを明確化する。

２．研究の視点および方法

きょうだい会に参加している 11 名に協力を得て、個別に面接調査を行った。調査は 2015 年 6 月 24 日～9 月 2 日に行い、面接時間は一回につき 20 分から 60 分であった。了解を得ることのできた協力者の面接内容は録音した。

分析の手順は以下の通りである。

①録音したインタビュー内容を逐語録に起こし、その逐語録の中から間投詞などの余分な品詞を除外し、セグメントに分割した。

②セグメントを、ライフイベントについての記述と、感情についての記述に分けた。

③ライフイベントについてのセグメントを、語り手ごとに時系列に並べた。この時、一つのライフイベントに対して複数のセグメントで語られているものは、合わせてひとつのまとまりとした。

④③で並べたライフイベントごとの記述に、各ライフイベントに対して感情が語られたセグメントを並列に並べ、ライフイベントと感情のセットを作成した。本研究の目的としては、「きょうだいの同胞に対する感情」に関する語りが主たる分析対象となるが、これを補うを分析したいと考えているが、重要なデータとしてきょうだいの内面についての語りも含めている。

⑤時系列に並べたライフイベントのセグメントについて、ライフイベントの主体、種類、生活の状態などの観点からコーディングを行い、コードに沿ってグルーピングを行った。

３．倫理的配慮

調査は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研 究 結 果

分析の手順に従い作業したところ、91のライフイベントと感情のセットが抽出された。91のセットをライフイベントの主体のコードに注目したことところ、〈同胞〉〈親〉〈自分（きょうだい)〉というグループに分類できた。次に〈同胞〉のグループ内でライフイベントについてコードでグルーピングを行ったところ、“発症（きょうだいが同胞の障害を認識)”、“生活”、“診断”、“アクシデント”、“死”、“死後”、“その他”というライフイベントの種類による下位グループが出来た。同様にして、〈親〉のグループでは、“入院”、“介護”、“死”、“その他”という下位グループが、〈自分（きょうだい)〉のグループでは、“出会い”、“距離”、“多忙”、“その他”という下位グループがそれぞれ抽出された。

5. 考 察

他の障害者のきょうだいと比較して、他の生来の障害を抱える同胞のきょうだいと異なり、関わりの始まりが同胞の発症であったこと、同胞が、解決に外部からの介入を必要とするようなアクシデントを起こすというライフイベントが見られたこと、幼少期における障害者同胞との関わりが無いため、親の関心不足などといった他の障害のきょうだいに見られる語りがなかったことが精神障害者のきょうだいのライフイベントの特徴と考えられた。

また、きょうだいの感情変化に影響を与える要因として、きょうだいと同胞の関わりを含む距離感（以下、「距離」)、並びにきょうだいの同胞に対する知識（以下、「知識」）が想定された。

「距離」については、感情の回復の過程の中で「距離」を構築し、「距離」の構築によって否定的な感情を生起しにくくなるが、「距離」が定まったところ所に、親の入院、介護、死などのライフイベントが発生すると、同胞との「距離」が短くなり、次の「距離」の構築のための試行錯誤が始まると考えられた。

「知識」については、「精神障害そのものに関する教科書的な知識」「観察によって得られた同胞の状態の理解」「同胞が起こすアクシデントなどの行動の原因を障害の特性として理解する」という三つの種類があることが分かった。これらは段階として存在すると考えられた。

更に、きょうだいの中での「距離」または「知識」が構築したのかどうかによって、感情変化に段階が見られると考えられた。